

(自著紹介)

## 『教育と学校をめぐる三大誤解』

田中 萬年 (職業能力開発総合大学校)

### はじめに

山積するわが国の教育問題の解決に政府が進める「教育基本法」改正が効力を発揮するとは国民は誰も思っていない。にもかかわらず、「教育基本法」改正案が衆議院で政府与党により単独採決が行われ、参議院可決され、制定された。しかし、教育として最も重要な国民の自立のための労働に関する学習の観点は改正法ではさらに薄まってしまった。それは「公」という言葉による画一化と表裏の関係にあるようである。

山田洋次監督が「学校Ⅲ」を製作した動機として、テレビ放送の離職者の職業訓練を見て、「これも重要な学校ではないか、と思ったから」と述べている。しかし、社会一般にはそのように認識されているとは言い難い。

職業訓練の意義の認識が十分になされていない理由の大きな一つに、教育と学校に対する独特な認識が有るためと考える。このことについて、特に明治期の問題を整理して広くご批判頂きたいと思い本書を公刊することにした。

### 1. 本書の構成

本書は以下のような構成をとっている。

まえがき—忘れられた学問のための「文部省」と「学校」／第1章 文部省の成立と変質／第2章 学校の成立と変質／第3章 「教育」とは何か／第4章 “Education”とは何か／第5章 「教育」と“Education”との同定／第6章 工場における「学校」の成立／第7章 社会における「学校」の成立／おわりに—真の「学校」の再生のために

### 2. 主な内容

次々に出されている様々な教育改革、学校改革案が成功しているとは言えないのは、明治初期の確立時の意図が政策的に曲げられ、ほとんどの人が文部省、学校、「教育」の役割と概念について誤解したままで議論をしているためである、という立場から本書では論じている。

第1章では文部省は教育を実施する為に設置されたのではなく、「(教)部省」は宗教の省であった「学問」=「学文」の「(も)ん部省」だったことを紹介している。

第2章では学校は教育を実施するために設立されたのではなく、「学問じよ(所)」であったことを紹介している。

第3章では「教育」とは人民の学習を意図することではなく、王が部下の育成のために孟子が創った言葉であり、明治8年以降に「学問」の言葉に代えて政府が使用するようになったことを紹介している。

第4章では“Education”は「教育」とは異なり職業を含んだ能力を「開発」することであることを紹介している。

第5章では概念が全く異なった概念の言葉である“Education”と「教育」が同定されてきた経過を明らかにしている。福沢諭吉が「教育」は不穏当で、「発育」であるべきと論じた背景も紹介している。また、両者の同定を決定付けた「教育勅語官定英訳」の役割を紹介している。

そして、庶民が社会生活に必要な本来の職業能力の形成を教育が軽視したため工場での教育訓練が開始され、「重ね餅システム」が定着したことを第6章で紹介している。

また十分に学校教育を受けることが出来なかった“社会的不運者”のために社会で学習施設が設立されたことを第7章で説いている。この施設が今日の公共職業能力開発施設へと発展してきたことを説いている。

以上のような整理の流れで寺子屋に職業教育機関としての機能があつた意義を検討し、社会、工場における教育を位置づけ、人材育成の大局的な観点を説いている。その論旨は、教育とは国民が自立するために働く能力を修得すべき営みであるはずである、という視座から展開している。

### 3. 本書の特色

本書では可能な限り絵や写真も入れて当時の状況を分かりやすく工夫した。巻頭の扉には歌川派浮世絵師の花里(一寸子)による「文学萬代の寶」をカラーで紹介している。この絵は子ども達が学んでいる(?)様子が極めて滑稽に、男女別々に描かれている。そのため本書でも2頁の見開きとして紹介している。絵の上方に寺子屋での「文学」の意味が連続して解説されている。その解説も拡大して扉に紹介すると共に、本文中には向井満氏による現代語訳も入れることができた。既刊書には絵の男女対での紹介、現代語訳の解説がなく、これらは貴重だと思われる。

解説によれば「文学」とは「学文」であることがわかる。その「学文」は明治になっても使われていたが、次第に「学問」に置き換わってきた。そのため、この頃までは「勉学」が使われていた。学問が教育に代わると勉学は「勉教」となるが、勉教では不適切なので、中国では本来の意味ではない「勉強」を転用したことが推測される。

第7章には、今日の公共職業能力開発施設の嚆矢と言える1923(大正12)年の職業輔導講習所前でハッピーを着た受講生と職員の写真を紹介している。当時は「職業訓練」の言葉はなく、教育の営みと大きな区別はなかった。

また、カバーの裏には企業内教育施設の嚆舂であり、1899(明治32)年の工業学校の設立と同時に設立された三菱工業予備学校の写真を掲載している。これらを見ると企業内教育がわが国で独特に発展してきた背景を理解できる。

(四六版・本文203頁、学文社2006年4月発行、1,500円+税)